昭和は活気と人情

学校長　横山　豊

令和7年4月2日、3日の2日間に渡り、岐阜新聞の1面に「昭和は『活気と人情』県民60歳以上には“古き良き時代”」と書かれた大きな見出しと共に「岐阜発昭和100年シン昭和論イメージ編」としたアンケート結果のマトリックスが掲載されていました。2025年は昭和100年に当たり、2月上旬にインターネットや誌面を通して「昭和のイメージ調査」というものが実施されました。そしてその調査に寄せられた183件の回答から浮かび上がってきた「昭和」の時代像が紹介されていました。

「昭和を表すワード」は活気と人情、働く、モーレツ社員など。アンケートの「時代のイメージ」では進歩や成長、人の温かさなどに関する記述が目立ったそうです。私は昭和30年（1955年）生まれですが、回答者の9割以上が私と同じ昭和生まれで、多くの人が「古き良き時代」として昭和にノスタルジーを感じていることが窺えたのだそうです。また、「人々の生きざま・働き方」についての回答では、当時CMでお馴染みだったフレーズ「24時間戦えますか」が20件も登場したそうで、昭和から平成へと移り変わった1989年の新語・流行語大賞にランクインした「モーレツ社員」「企業戦士」のイメージと共に昭和の働き方の“代名詞”となっていたとのことでした。まさに若い時の自分を象徴する言葉のようで、自分自身がまさに「昭和」なのだと思わされました。

また、戦前から昭和30年代生まれ（60歳以上）の世代では「貧乏なのに心は豊かだった」「隣近所と『みそ貸してお米貸して』の付き合いがあった」など、人情にまつわるエピソードもたくさん寄せられたそうで、これも自分自身が生まれ育った環境を懐かしく思い出す記事でもありました。

さらに、「給料は現金でもらえたのでみんなウキウキしていた」「働けば働くほど給料が増えた時代」「頑張った人が認められた」「パソコンなどもない中で人が創り出してきたものはすごい」「新しい時代への希望があった」など当時の右肩上がりだった社会の活力や、日本の高度成長の時代を感じさせるコメントです。

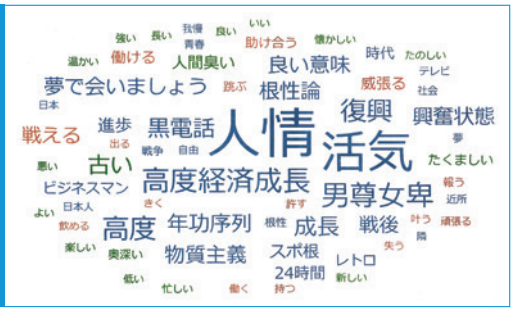
私の祖父は明治36年（1903年）生まれでした。偶然ですが、鶯谷中学・高等学校の創立の年に生まれました。そして、明治、大正、昭和と3つの時代を生き抜きました。のちに私が高校生となり、明治時代の文豪たちの本を初めて読んだ時、その心の純粋さに心を打たれ、「明治」という時代に強く憧れを感じたことがあります。そして今、私が生きてきた昭和、平成、令和という3つの時代を振り返ってみると、私も昭和という時代に強いノスタルジーを感じています。

20世紀は科学技術と情報通信が大いなる進歩を遂げ、人々の生活は急激により快適で豊かなものとなっていきました。しかし反面20世紀は2つの世界大戦を含む悲惨なたくさんの戦争の時代でもありました。そして21世紀となり、はや四半世紀が過ぎ今年は2025年。AIの急速な進化に象徴されるように、今年開催された大阪万国博覧会にもその科学と情報におけるさらなる進歩の片鱗が垣間見られました。

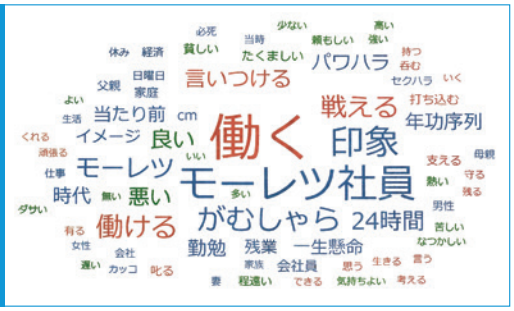
しかし、今人々の生活や心は本当に以前よりも豊かになっているのでしょうか。昭和100年を迎えた今年。今回の新聞記事を読んでみて思うことがあります。ここにあるワードの中には、人間が忘れてはならない、そしてこれからも大切に守っていかねばならないものがいくつかあるのではないでしょうか。

皆さんもこの新聞のワードを読んでみて、これからの日本の未来について考えてみてください。

「昭和」という言葉から連想するイメージ



「昭和」の人々の生きざま、働き方



※ユーザーローカルのAIテキストマイニングで分析。
言葉の登場頻度等を文字の大きさで示した。
青色は名詞、赤色は動詞、緑色は形容詞。